

昭和58年度藤原賞受賞記念講演

都 田 菊 郎*

この講演は気象学会春季大会（筑波）でテープにより為されたものを起稿し、都田氏の御了解を得て掲載することになったものです。〔「天気」編集委員会〕

このたびは藤原賞をいただくことになり、大変ありがとうございます。本来ならば、帰国して、あいさつすべきところですが、なんとも都合がつかず、テープでお礼のことばを述べることにしました。しかし、かえって私自身が姿をあらわすよりは、この方が効果があるのではないかと、ちょうど心霊術のように、しゃべることばもおごそかに聞こえるかもしれません。とにかく5分間だけ、日本のロボット式にしゃべります。

さて、私の藤原賞の主旨は、延長予報モデルの開発につくし、1ヶ月予報の可能性を示した、ということです。私の仕事は、ほとんど天気予報に関するところで、恐縮ながら大変プラグマティックな問題です。しかし、プラグマティックといっても、それを実現するには、まず天気や気象を理解しなくてはならず、それには、ケンブリッジ大学の数学者や、コロラド・ステイト・ユニヴァーシティの天気屋も一様に貢献するわけです。ですから、私は前から思うのですが、天気や気象は人間社会のみんなが賞味できるように神様が与えたのではないかと、道を行く人は天気がわるいといつて文句をいいますが、これはおかみさんの悪口をいうのとちがって文句をいっても誰も傷つかない、オックスフォード大学の数学者は、精密な数学の論理を適用して面白がったりする具合です。

さて、前に私は、気象学の研究態度、あるいは秘訣のようなものをきかれたことがある。いや私だけではなく、100年祭記念の事業としてみんながきかれたわけですが、ともかくこの問題についてどう考えるか。大体日本には理学界に、寺田寅彦流の自然観や、坪井忠二の率直に考えてすなりとしゃべる、という伝統があります。私が日本にいたときに、中谷宇吉郎のエッフェル塔から紙を落とす話を聞いたことがあります。つまり、エッフェル塔のてっぺんから紙を落とす、紙はひらひらと舞って下りる、その運動は大変優雅ですが、物理的に理解す

るには若干むずかしい。さてこのむずかしい問題を解決して、はたして意味があるかどうか。そこで私は、この問題をこういう風に考えます。この問題をばらばらにして、いったい、A：このメカニズムは気象学の体系からいってエッセンシャルか、B：この研究をして何が役に立つか。この第二の点は19世紀から20世紀の半ばにかけての科学万能時代にはあまり重視されなかった、ところが、1969年ごろから人間社会の科学観が変わってきたように思えるのです。私の態度はどちらかというとならBの方ですが、しかし、理想的にはBを65%、Aを35%ぐらいにミックスしてやりたい気持です。もっとも年をとるにしたがってAの要素が多くなって来るかもしれません。こっちの方が遊びの要素が多いですからね。

研究には二つ重要なことがあるのではないのでしょうか。それは、好きで熱中すること、それからねばりということ。つまり、頭がいいかどうかは、第二、第三の問題なのではないですか。ですから、東大を出ても出なくてもよろしい。世界では、ロスビー、ストンメル、ナマイアスなど第一級の人物は、Ph. D. ではない。しかし、こういう人は底の知れない根性を持っています。まあ、といったわけで、好きこそ物の上手なれ、ということが日本にあります。それとねばり、英語ではねばりのことを intellectual stamina というのではないですか。このスタミナを持続するには、孤独に耐えて、そして体をきたえねばならない。ちょうどボクサーのように、ジョギングなどをして、体をきたえる。私は1967年に山本義一先生からジョギングということを教わった。それ以来これ続けているんですが大変よろしい。これをするとまず精神上よろしい。それに sexual appetite も向上するのではないですか。まあ、だんだん、私の話も精神訓話めいてまいりましたが、これは激励のつもりです。私は、役に立つことばかりやって恐縮ですが、ひとつ、日本のみなさん、がんばって下さい。

* Kikuro Miyakoda, GFDL/NOAA, U.S.A.